

## 12月講話会

箏曲・名曲中の名曲

### 「『六段の調』は、キリストン音楽だった！」ご報告

明けましておめでとうございます。

先月12月の講話会は、NPO法人大友氏顕彰会副理事長の佐藤弘俊様をお迎えし、「『六段の調』は、キリストン音楽だった！」と題してお話をされて頂きました。箏曲「六段の調」はお正月には必ず耳にする箏（こと）の名曲ですが、それが実はキリストン音楽と関係していたということを検証する大変興味深い内容がありました。



佐藤講師は、今から8年ほど前に、実際に大分市で開催された大友氏顕彰会フォーラムで「六段の調」とグレゴリオ聖歌のクレド（信仰宣言）のコーラスを同時演奏し、比較検証しました。講話では、この時の録音を交えて解説頂きました。両曲の入り方から抑揚、更には終わり方まで全てを聴き検証させて頂きました。とくに終わるところなど両曲がピタッと合って終わり、私たち素人目でも「六段の調」とこのクレドが極めて近いということに納得がいくものがありました。今回は、この時の主な内容をご報告いたします。

#### 1. 両曲が「似ている」と最初に気づいた人は誰だったか（もともとそれに近い説はあった）

それは、大牟田市に住む箏演奏家の坪井光枝氏（故人）でした。坪井氏は、近世箏曲の基礎を作った諸田賢順（もろたけんじゅん 1534-1623）の研究を続けるうちに教会で歌われるグレゴリオ聖歌のクレドが「六段の調」と似ていることに気づきました。坪井氏は、このことを音楽学の大家皆川達夫氏（NHKラヂオ「音楽の泉」解説者）に報告したのでした。中世・ルネサンスの音楽などに詳しい皆川氏は、最初はあまり気に留めなかったようですが、数年後この指摘の重大性に気付かれ、「六段の調」と「クレド」の楽譜対照表を作成し両者があまりにも整然と合致することが判り、更に同時演奏を実際に試み検証したのでした。（この演奏模様は収録され日本伝統文化振興財団からCDとして一般に販売されています）

#### 2. 「六段の調」誕生の道 坪井光枝氏の推察

「六段の調」は、近世箏曲の祖・八橋検校（1614-1685）の作と伝えられていますが、坪井光枝氏によると八橋検校の師の師に当たる筑紫箏創始者の諸田賢順（1534-1623?）が制作に関わり、ここには大友義鎮も関係していたというのです。

##### ① 諸田賢順はどのような人だったのか

諸田賢順は、大牟田に生まれ、父を7歳で亡くし、善導寺（久留米市）に入門しました。そこは浄土宗鎮西派の総本山であり、仏教教学の他に『善導寺楽』と呼ばれる莊厳で華麗な管弦演奏の奏者育成もしていました。諸田賢順は、ここで箏を学びその技能を磨いていったのですが、そこでの練習にのみ満足せず英彦山を訪れた中国人鄭家定に、各種の琴曲、箏曲を学んだと言われます。やがて賢順独自の作曲も加えてこれを集大成し、彼の独特な箏の曲は『賢順の筑紫箏』と呼ばれるようになったのでした。

このころ筑後・筑前・豊後・豊前4カ国の守護職に任せられた大友義鎮は、筑後を度々訪れ賢順を知るところとなります。義鎮は賢順の奏でる箏の音に強く惹かれ、賢順を豊後に招きます。賢順は、これ以降



7年間豊後で暮らしました。この当時、豊後はキリストン文化の全盛期でもありました。

## ② 賢順がみた豊後府内(1562-1569 7年間)



当時イエズス会宣教師が母国に送った手紙が残っています。ここからわかったことは、豊後の状況は、教会ではグレゴリオ聖歌が歌われ、教理や旧約聖書の物語、キリストの生涯等を全て音楽にし、それらをヴィオラ・ダ・アルコに合わせて歌っていたということです。(写真左 西洋音楽発祥記念碑)

義鎮は、禅の得道により宗麟と名前を改めますが、得道後も側近や家臣を伴い頻繁に教会に足を運びミサの終わった後には教理を学んで帰っていた史実が残っています。宗麟は賢順を教会に案内をし、このグレゴリオ聖歌を一緒に聴き、また宣教師たちには賢順の筝曲を聴かせた筈です。その反応を見たかったかもしれません。また筝楽を極める域にあった賢順が、西洋の珍しい楽器ヴィオラの演奏やグレゴリオ聖歌に大きな衝撃や感動を覚えたであろうことは容易に想像できます。また、同時にこれを吸収しようとした賢順であったとしても不思議ではないと坪井氏は推察しています。

## ③ 六段の調の原型が、豊後での教会音楽によって生まれたと考察する坪井氏

諸田賢順の墓や戒名、位牌まで調べた坪井氏は、賢順がキリストンの信仰をもっていたことを明らかにしています。このことからも、筝曲奏者の諸田賢順が、グレゴリオ聖歌クレドの意味まで理解していたことが推察され、同時に「筑紫筝」独創的な境地を開いた程の賢順ですから新鮮な衝撃を受けたであろうグレゴリオ聖歌を“筝で弾いてみたい”と試みたとしても不思議ではないと坪井氏はみています。このような状況から、坪井氏は、「六段の調」の原型なるものが、賢順が豊後に滞在していた時に生まれたと考察したのでした。

## ④ キリストン禁制下にどのように六段の調は、八橋検校まで伝えられたか

宗麟の没後、豊臣秀吉は、キリストン禁教令を出しました。この禁制はそれ以降厳しさを増し、賢順は、その後、筑紫善導寺（久留米）に戻りまた他へ移りますが、このキリストン音楽と関わりを持つ「六段の調」、「乱」、「八段」の3曲を秘曲として、決して外に出さずに守っていました。晩年になり73歳も年下の玄恕（げんじょ）に伝授し、賢順は90歳で他界しますが、その後筑紫善導寺の筝演奏家玄恕を京より尋ねたのが、八橋検校（玄恕より8歳下）でした。八橋は、入門を願うも最初拒否されますが、毎日門外で佇み、数日後になって許されたと言われます。「六段の調」は、慎重の上にも慎重を期す中でその命脈が引き継がれてきました。

## 3. 大分は南蛮文化の発祥の地

佐藤講師は、南蛮文化は当時の西洋文化そのものを指すのではなく、この西洋文化が日本文化と出会い、融合され新しく生まれた芸術や文化であると強調されました。ここには、大友宗麟の存在が大きく、宗麟は、特に文化芸術に優れた高い感性を持ち、全国から商人、僧侶、蹴鞠、金工、絵師、音楽家、医者、薬師、茶、公家、大工、技術者等それぞれの分野で第一級の名人を招集しました。その人士たちが、府内の西洋の文化に接し、交流する中から世界でも見たことのない文化、南蛮文化が生まれたのです。その場所が、正にここ豊後大分だったのです。大分市は、この歴史的な場面が豊後府内であったことを鑑み平成25年に『南蛮文化発祥都市宣言』をしました。

(メモ青井勝久)

以上

